

Title	奥井さんを偲ぶ
Sub Title	Dr. F. Okui, his human image
Author	有賀, 喜左衛門
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.11/12 (1965. 12) ,p.1118(16)- 1121(19)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	奥井復太郎博士追悼特集 追悼の辞
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19651201-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奥井さんを偲ぶ

有賀喜左衛門

奥井さんと初めて会った時のことはよく覚えているが、そのはっきりした日時をどうしても思い出せない。それは私がまだ東京教育大学にいた時であり、もちろん戦後である。この大学の社会学の岡田謙教授と大学院設置のことで、葉山のお宅に、夜分にお伺いした。私共のお願いした件については、てきばきと、実にはっきりした裁断と助言とを頂いたことが印象に残っている。

奥井さんは其頃随分いそがしくなっており、いろいろな仕事に関係されて、委員のようなことも少なくなかったらしい。その晩も、御用事でお宅に早く帰ることができない事情であったが、私共の用事も緊急なものであったから、無理にお願いした。もちろん初対面であったが、奥井さんは、いやな顔もせず、親切であったことが、私の心に深く残っている。

私が東京教育大学を定年で退職した年の前年（昭和三十一年）の八月に、私はアムステルダムで開かれた社会学連合第三回世界会議に、日本学術会議から出張を命ぜられた。その年、奥井さんは私を慶応義塾文学部社会学教授に推薦して下さい。そして私が九月、ロンドンに滞在中に、そのことが文学部の教授会で内定されたという知らせをうけた。

私は奥井さんとは学問の上でも、個人的にも、そんなに深いつき合いをして来たわけではないけれど、奥井さんは葉山にお宅があったし、私は逗子に住んでいたので、逗子駅で一緒にになり、車中交際を何度か重ねていた。それは偶然に一緒になったのであり、しめし合せて一緒になったことは、ほとんどなかった。

奥井さんは常識が豊かであり、いろいろの仕事にも関係されており、見識もあったから、私の方が教えられることが多かった。その上に奥井さんは清純な性格を持っておられ、実に素直で、飾り気がなかったことが、私にはうれしくて、いつも気持よく話げできた。

私が慶応へ行く話が始まった頃は、奥井さんはもう塾長であった。私が三田へ通勤するようになった頃は、奥井さんは塾の方がいそがしくて、毎日早い電車で出かけたから、私のように週二、三日しか出ず、おそい電車で出かける者とは、逗子駅で一緒になることは、だんだん少なくなった。私は三田へ行っても、塾長などに会うことは好まなかったので、止むを得ない用事の外は会うことはほとんどなかった。

それでも同じ会合に出て、東京からの帰りに一緒になった時、奥井さんは、私の乗る二等車で、立ちながら、逗子まで話をして帰ったこともあった。私が「疲れるから一等車へ行きましょう」といっても、奥井さんはなかなか承知しなかったこともある。塾長をしている間に、体を大分こわされたと思うが、こんな時には、そういうことに頓着しない様子であった。塾長を辞してからのことだが、私の甥が経済学部の学生であって、ある会社への就職志望のことがあり、私も心をなやましていた時のことである。甥は軟式庭球部のマネージャーをしていた。はじめある教授のゼミにはいったが、その時は選手だったので、出席がむずかしくなり、途中で止めてしまった。それで就職のための推薦状を書いてもらう教授もなかった。私も困ったので、奥井さんをお願いした。奥井さんはいそがしい中を、私の甥に会って下さって、面接を丁寧にした上で、その所見を推薦状に下さった。その所見は、私が甥を見ていることと、ほとんどちがわなかったことに驚いた。こういうことは、人間の見方に真実な心がこもっているからだと思っている。

その後私は奥井さんのお宅を訪ねたことがある。その時は、奥井さんの割にお暇の時であったから、ゆっくりいろいろな話をした。奥井さんは人に気づかいをさせぬ人柄であり、非常に自然で、素直な感じが、奥井さんとお会いしていると感じられたのも、今、感慨深く、しみじみと思い出される。

葬儀の時に頂いた奥井さんの生前に愛唱していた聖書の言葉の一つは、幼子の如く素直に生きるという意味のものであったが、それは奥井さんの生活態度にびったりしている。

奥井さんの学問の仕事では、昭和一五年に出版された「現代大都市論」(有斐閣)は研究業績としては最も大きく、すぐれているものの一つである。この書は、奥井さんの三〇歳頃の作であり、奥井さんは日本における都市研究の先駆者の一人である。著作年表を見ても、この書に先立ち、昭和二年頃から、都市研究の論文を相次いで出していた。私は奥井さんと同じ年(明治三〇年)の一月に生れて、年齢ばかりの先輩であっても、昭和二年頃には、学問をやるうかどうしようか、迷いに迷っていたのだから、奥井さんが早く鋭鋒を表わしたことに驚異の念を抱いている。これ以後奥井さんは次第に都市社会学を開拓し始めて、「現代大都市論」を出すまでに、いくつかの実証研究を積み重ねていたことはすばらしいことであった。そして其後「現代大都市論」は古本界で高価を呼んでいたことを見ても、日本の都市社会学が今日のように発達するまでに、かなりの年数を要したことが考えられる。

日本都市学会の発足がいつであったか、資料が見つからないので、わからないが、戦後その会長として、磯村英一教授と共に、この学会を育成して来たことは忘れられない功績である。「現代大都市論」を見ると、都市研究が今日のように痛切に問題にされなかった時、すでにそれを予見していたことは極めて重要なことであった。

「現代大都市論」のあとでも、戦中から敗戦直後にかけて、いくつかの研究論文を発表しておられるが、戦後はむしろ日本都市学会の育成や都市問題について、実践的に尽力することに中心がおかれた。このことはそれだけ都市の研究が、社会に

おいて、多面的に要求されて来たことを示すものであり、そこに奥井さんの業績としての重要さがあったことを示している。だから私は奥井さんがこんな早くなくなったことを痛惜している。

奥井さんの学問を思うと、都市研究が第一に浮んで来るが、奥井さんの人柄を偲ぶに、都市研究の前にラスキンの研究があったことを落してはならないと私は思っている。

(一九六五年八月二日稿)